目次

凡例　九

上つ巻　序を并せたり

序第一段　稽古照今　（三三五）一三

序第二段　古事記撰録の発端　（三三五）一四

序第三段　古事記の成立　（三三六）一六

別天つ神五柱　（三三八）一九

神世七代　（三三八）一九

伊邪那岐命と伊邪那美命　（三三八）二〇

1　国土の修理固成　（三三八）二〇

2　二神の結婚　（三三九）二〇

3　大八島国の生成　（三三九）二三

4　神々の生成　（三四〇）二四

5　火神被殺　（三四一）二六

6　黄泉の国　（三四二）二八

7　禊祓と神々の化生　（三四四）三一

8　三貴子の分治　（三四五）三三

9　須佐之男命の泣　（三四五）三四

天照大神と須佐之男命

1　須佐之男命の昇天　（三四六）三五

2　天の安の河の誓約　（三四七）三六

3　須佐之男命の勝さび　（三四八）三八

4　天の石屋戸　（三四八）三九

5　五穀の起原　（三五〇）四一

6　須佐之男命の大蛇退治　（三五〇）四一

大国主神　（三五二）四七

1 稲羽の素兎 (一五二) 四七
2 八十神の迫害 (一五三) 四九
3 根の国訪問 (一五三) 五〇
4 沼河比売求婚 (一五五) 五四
5 須勢理毘売の嫉妬 (一五六) 五六
6 大国主の神裔 (一五八) 五八
7 少名毘古那神と国作り (一五八) 五九
8 大年神の神裔 (一五九) 六一
葦原中国の平定 (一六〇) 六二
1 天菩比神 (一六〇) 六二
2 天若日子 (一六一) 六三
3 建御雷神 (一六三) 六七
4 事代主神の服従 (一六三) 六八
5 建御名方神の服従 (一六三) 六九
6 大国主神の国譲り (一六四) 七〇
邇邇芸命 (一六五) 七二
1 天孫の誕生 (一六五) 七二
2 猿田毘古神 (一六五) 七三
3 天孫降臨 (一六五) 七四
4 猿女の君 (一六六) 七五
5 木花の佐久夜毘売 (一六七) 七七
火遠理命 (一六八) 七九
1 海幸彦と山幸彦 (一六八) 七九
2 海神の宮訪問 (一六九) 八〇
3 火照命の服従 (一七〇) 八三
4 鵜葺草葺不合命 (一七一) 八六
中つ巻
神武天皇 (一七三) 八九
1 東征 (一七三) 八九
2 皇后選定 (一七七) 九八
3 当芸志美美命の反逆 (一七九) 一〇一
綏靖天皇 (一八〇) 一〇三
安寧天皇 (一八〇) 一〇三

天照大神と須佐之男命

1　須佐之男命の昇天

故ここに速須佐之男命言ひしく、「然らば天照大御神に請して[一]罷らむ。」といひて、すなはち天に參上る時、山川悉に動み、國土皆震りき。ここに天照大御神聞き驚きて詔りたまひしく、「我が汝弟の命の上り來る由は、必ず善き心ならじ。我が國を奪はむと欲ふにこそあれ。」とのりたまひて、すなはち御髮を解きて、御角髮に纏きて、すなはち左右の御角髮にも、また御鬘にも、また左右の御手にも、各八尺の勾璁の五百箇の御統の珠を纏き持ちて、背には千入の靫を負ひ、ひらには五百入の靫を附け、また稜威の高鞆を取り佩ばして、弓腹振り立てて、堅庭は向股に蹈みなづみ、沫雪如す蹶散かして、稜威の男建蹈み建びて待ち問ひたまひしく、「何故上り來つる。」と、とひたまひき。ここに速須佐之男命、答へ白ししく、「僕は邪き心

一　事情を話して。
二　書紀には「吾弟」とある。
三　忠誠の心。
四　男装して。
五　大きな曲玉の数多くを一本の緒に貫き統べたもの。
六　千本もの矢を入れる靫。靫は矢を入れる武具。
七　未詳。脇の意か。
八　威勢よく高い音のする鞆。鞆は皮で巴形に作った武具で、左肘につけて弓弦の反動を受けるもの。
九　弓の末を起こして。

者が高い者に対する場合の自称代名詞として用いられている。　六　亡き母。
七　地底の片隅の国の意か。
八　神は神の行動を示す接頭語、追放なさった。
九　近江の多賀神社に鎮座されている。書紀には淡路の幽宮に隠れたとある。

無し。ただ大御神の命もちて、僕が哭きいさちる事を問ひたまへり。故、白しつらく『僕は妣の國に往かむと欲ひて哭くなり。』とまをしつ。ここに大御神詔りたまひしく、『汝はこの國に在るべからず。』とのりたまひて、神逐らひ逐らひたまへり。故、罷り往かむ狀を請さむと以爲ひてこそ參上りつれ。異心無し。」とまをしき。ここに天照大御神詔りたまひしく、「然らば汝の心の清く明きは何して知らむ。」とのりたまひき。ここに速須佐之男命答へ白ししく、「各誓ひて子生まむ。」とまをしき。

2 天の安の河の誓約

故ここに各天の安の河を中に置きて誓ふ時に、天照大御神、まづ建速須佐之男命の佩ける十拳劒を乞ひ度して、三段に打ち折りて、瓊音ももゆらに、天の眞名井に振り滌ぎて、さ嚙みに嚙みて、吹き棄つる氣吹のさ霧に成れる神の御名は、多紀理毘賣

一〇 堅い地面に股までふみ入れ。
一一 柔らかい雪を蹴散らすように蹴散らして。
一二 威勢よく雄々しい叫びをあげて、地面をしっかり踏みしめて。
一三 朝廷に対する反逆の心。清き心の反対。

一一 心。謀叛心。
二 心が忠誠であること。
三 吉凶黒白を判断する場合に、必ずかくあるべしと心に期して神意を伺う行為。卜占の性質が強い。
四 高天の原にあると信ぜられた川。
五 玉の音もさやかに。
六 神聖な水を汲む井。
七 「さ」は接頭語、嚙みに嚙んで。
八 吐き出す息吹の霧。

命。亦の御名は奥津島比賣命と謂ふ。次に市寸島比賣命。亦の御名は狹依毘賣命と謂ふ。次に多岐都比賣命。三柱 速須佐之男命、天照大御神の左の御角髮に纏かせる八尺の勾璁の五百箇の御統の珠を乞ひ度して、瓊音ももゆらに、天の眞名井に振り滌ぎて、さ嚙みに嚙みて、吹き棄つる氣吹のさ霧に成れる神の御名は、正勝吾勝勝速日天之忍穗耳命。また右の御角髮に纏かせる珠を乞ひ度して、さ嚙みに嚙みて、吹き棄つる氣吹のさ霧に成れる神の御名は、天之菩卑能命。また御髻に纏かせる珠を乞ひ度して、さ嚙みに嚙みて、吹き棄つる氣吹のさ霧に成れる神の御名は、天津日子根命。また左の御手に纏かせる珠を乞ひ度して、さ嚙みに嚙みて、吹き棄つる氣吹のさ霧に成れる神の御名は、活津日子根命。また右の御手に纏かせる珠を乞ひ度して、さ嚙みに嚙みて、吹き棄つる氣吹のさ霧に成れる神の御名は、熊野久須毘命。幷せて五柱なり。ここに天照大御神、速須佐之

一「正勝吾勝」は、正しく私は勝った、「忍穗」は多し穗で豊かに稔った稲穗の意。

男命に告りたまひしく、「この後に生れし五柱の男子は、物實[一]我が物によりて成れり。故、自ら吾が子ぞ。先に生れし三柱の女子は、物實汝が物によりて成れり。故、すなはち汝が子ぞ。」かく詔り別けたまひき。

故、その先に生れし神、多紀理毘賣命は、胸形[二]の奥津宮に坐す。次に市寸島比賣命は、胸形[三]の中津宮に坐す。次に田寸津比賣命は、胸形[四]の邊津宮に坐す。この三柱の神は、胸形君等のもち拜く三前の大神なり。故、この後に生れし五柱の子の中に、天菩比命の子、建比良鳥命、こは出雲國造、无邪志國造、上菟上國造、下菟上國造、伊自牟國造、津島縣直、遠江國造等が祖なり。次に天津日子根命は、凡川內國造、額田部湯坐連、茨木國造、倭田中直、山代國造、馬來田國造、道尻岐閇國造、周芳國造、倭淹知造、高市縣主、蒲生稻寸、三枝部造等が祖なり。

3　須佐之男命の勝さび

ここに速須佐之男命、天照大御神に白ししく、「我が心清く明[五]し。故、我が生める子は手弱女[六]を得つ。これによりて言さば、

一 物の出来るもと。

二・三・四 福岡県宗像郡沖の島、同郡大島、同郡玄海町田島にそれぞれある。この三宮が宗像神社。

五 忠誠である。

六 たおやかな女。

一 勝ちにまかせて。

自ら我勝ちぬ。」と云して、勝さびに、天照大御神の營田の畔を離ち、その溝を埋め、またその大嘗を聞こしめす殿に屎まり散らしき。汝、然爲れども天照大御神は咎めずて告りたまひしく、「屎如すは、醉ひて吐き散らすとこそ、我が汝弟の命、かく爲つらめ。また田の畔を離ち、溝を埋むるは、地を惜しとこそ、我が汝弟の命、かく爲つらめ。」と詔り直したまへども、なほその惡しき態止まずて轉ありき。天照大御神、忌服屋に坐して、神御衣織らしめたまひし時、その服屋の頂を穿ち、天の斑馬を逆剝ぎに剝ぎて墮し入るる時に、天の服織女見驚きて、梭に陰上を衝きて死にき。

4 天の石屋戸

故ここに天照大御神見畏みて、天の石屋戸を開きてさし籠りましき。ここに高天の原皆暗く、葦原中國悉に闇し。これによりて常夜往きき。ここに萬の神の聲は、さ蠅なす滿ち、萬の

二 新穀を召上がる祭殿。
三 土地が惜しいとして。
四 ますます甚だしかった。
五 清浄な機屋。
六 神に献る御衣。
七 まだらの馬の皮を尾の方から逆に剝いで。以上、延喜式の大祓詞に見える「天つ罪」の中の畔放(アハナチ)、溝埋(ミゾウメ)、屎戸(クソヘ)、逆剝(サカハギ)に当たる。
八 機の横糸を通す道具。
九 高天の原にある岩窟。
一〇 岩戸に隠るということは貴人の死を意味する。万葉集巻二に「高照らす、日の皇子は、天の原、岩戸を開き、神上り、上りいましぬ」、同巻三に「豊国の鏡の山の岩戸たて隠りにけらし待てど来まさぬ」とある。
一一 夜ばかりで昼がないこと。夜ばかりが続いた。

妖悉に發りき。ここをもちて八百萬[一]の神、天の安の河原に神集ひ集ひて、高御產巢日神の子、思金[二]神に思はしめて、常世[三]の長鳴鳥を集めて鳴かしめて、天の安の河の河上の天の堅石[四]を取り、天の金山の鐵を取りて、鍛人天津麻羅を求ぎて、伊斯許理度賣命に科せて鏡を作らしめ、玉祖命に科せて、八尺の勾璁の五百箇の御統の珠を作らしめて、天兒屋命、布刀玉命を召して、天の香山の眞男鹿[五]の肩を內拔きに拔きて、天の香山の天の朱櫻を取りて、占合ひまかなはしめて、天の香山の五百箇眞賢[六]木を根こじにこじて、上枝に八尺の勾璁の五百箇の御統の玉[七]を取り著け、中枝に八尺鏡[八]を取り繫け、下枝に白和幣[九]、青和幣を取り垂でて、この種種の物は、布刀玉命、太御幣と取り持ちて、天兒屋命、太詔戸言禱[一〇]き白して、天手力男[一一]神、戸の掖に隱り立ちて、天宇受賣命[一二]、天の香山の天の日影[一三]を手次に繫けて、天の眞拆[一四]を鬘として、天の香山の小竹葉[一五]を手草に結ひて、天の石屋

一 おおぜいの神々。氏族の代表者の神格化。
二 人間の智力の神格化。この神に思慮の限りを尽くさしめたのである。
三 常世の国から来た鶏。この鳥を鳴かせたのは、太陽の出現を促す呪術。
四 堅い石。鉄を鍛える時に金敷の石(礎)にするために取って来たのである。
五 肩の骨を丸抜きにして。
六 神意をおしはからせて。
七 枝葉の繁った常磐木を根のまま掘り取って。
八 書紀には「八咫鏡」とある。大きな鏡の意か。
九 木綿(ユウ)と麻。
一〇 祝福の祝詞(ノリト)を申して。
一一 腕力の神格化。
一二 名義未詳。古語拾遺には強女(オズメ)の意に取っている。

戸に槽伏せて[一]踏み轟こし、神懸[二]りして、胸乳をかき出で裳緒を陰に押し垂れき。ここに高天の原動みて、八百萬の神共に咲ひき。

ここに天照大御神、怪しと以爲ほして、天の石屋戸を細めに開きて、内より告りたまひしく、「吾が隱りますによりて、天の原自ら闇く、また葦原中國も皆闇けむと以爲ふを、何由にか、天宇受賣は樂をし、また八百萬の神も諸咲へる。」とのたまひき。ここに天宇受賣白ししく、「汝命に益して貴き神坐す。故、歡喜び咲ひ樂ぶぞ。」とまをしき。かく言す間に、天兒屋命、布刀玉命、その鏡を指し出して、天照大御神に示せ奉る時、天照大御神、いよよ奇しと思ほして、稍戸より出でて臨みます時に、その隱り立てりし天手力男神、その御手を取りて引き出す[六]即ち、布刀玉命、尻くめ繩をその御後方に控き度して白ししく、「これより内にな還り入りそ。」とまをしき。故、

一 空っぽの入れ物をうつぶせにして。
二 神が人に乗り移った時の状態になって。
三 ウタマヒと訓んでもよい。歌舞のこと。
四 鏡は太陽の象徴(日像)と考えられていたので、それを見られた大神は、別な日神がいると思われて、一層不審を抱かれた。
五 そろそろと。徐々に。
六 引き出すや否や。
七 今のシメ縄と同じ。書紀には「端出之縄」とある。
一三 さがりごけ(蘿)。
一四 まさきの葛。ツルマサキのこと。 一五 手に持ち加減に結び束ねて。

天照大御神出でましし時、高天の原も葦原中國も、自ら照り明りき。

ここに八百萬の神共に議りて、速須佐之男命に千位の置戸を負せ、また鬚を切り、手足の爪も拔かしめて、神逐らひ逐らひき。

5 五穀の起原

また食物を大氣津比賣神に乞ひき。ここに大氣都比賣、鼻口また尻より、種種の味物を取り出して、種種作り具へて進る時に、速須佐之男命、その態を立ち伺ひて、穢汚して奉進るとおもひて、すなはちその大宜津比賣神を殺しき。故、殺さえし神の身に生れる物は、頭に蠶生り、二つの目に稻種生り、二つの耳に粟生り、鼻に小豆生り、陰に麥生り、尻に大豆生りき。故ここに神產巢日の御祖命、これを取らしめて、種と成しき。

6 須佐之男命の大蛇退治

故、避追はえて、出雲國の肥の河上、名は鳥髮といふ地に降り

一 多くの台の上に置く沢山の品物。罪穢れをはらうために科するのである。

二 書紀には「使レ拔レ髮」、「拔二其手足之爪一贖之」とある。

三 食物を掌る女神。以下の話は、書紀の一書では月夜見尊と保食神（ウケモチノ神）の話となっている。

四 おいしい食べ物。

五 書紀の一書には、保食神の頂に牛馬、ひたいに粟、眉に蚕、眼に稗、腹に稲、陰に麦・大豆・小豆が化生したとある。

六 カミムスヒの御母神の意。

七 追放されて。

八 島根県斐伊川の上流の船通山に当たる。